

## 〈君待てど—文化大革命の陰で〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

一九六〇〜七〇年代、中国に文化大革命の嵐が吹き荒れていたころ、ニュースで見た血気盛んな人民服の群集の行進の陰で、いったい何が起きているのかわからなかった。ただ不気味だった。

それから四半世紀を経て、その時代の出来事—多くは悲劇を描いた映画が次々に作られるようになり、少しずつその実態が明らかになってきた。政治が悪いとどれほど国民は苦勞をするか、というような単純な話ではないが、それよりも、人間はどんな状況にあっても愛を求めるといふ愛の普遍が胸を打つ。切ない愛の闘いを描く本作もそうした映画の一つである。

一九七七年革命終結とともに収容所から解放された元大学教授ルー・イエーンシーはようやく我が家にとどり着く。が、二〇年ぶりに再会した妻ワンイーの様子がおかしい。再会を喜ぶでもなく、イエーンシーをまるで他人扱い。知ら

ない名前で呼び、「帰れ」とさえ言う。長年夫を待ち続けた妻は、心勞のあまりに夫の記憶だけを失っていたのだ。

実は、三年前に一度、遠目の姿だけを確認し合ったことがあった。共産党に逆らう右派として捕えられ強制労働所に入れられていたイエーンシーが逃亡し、こっそり妻に会いに戻ったのだ。ドアを密かに叩くイエーンシーを帰宅した一人娘のタンタンが見つける。不遇な暮らしは父親のせいと恨んでいた娘は、父を追い払う。そればかりか、バレエ団で主役に推薦してもらった見返りに父親の居場所を密告する。翌朝、手作りのまんじゅうと上着を抱えて密かに夫に会いに出かけたワンイーは、約束の駅の陸橋で夫が逮捕されるのを見たのだ。

ワンイーは周囲の誰が言い聞かせても目の前の夫を夫と認めない。そのくせ、夫の罪を許すとの当局の通知を見て、「生きて帰れるのね」と涙ぐむ。家

にカギをかけないのはいつでも夫が帰ってこられるため、娘を追い出したのは密告を許せないうため。すべて夫への愛のためなのだ。ただ、その夫人の記憶がすっぽりと消えてしまっている。

この信じがたい現実をイエーンシーは受け入れ、動き出す。家の向かいの空き家を借りて住み、今朝も夫の名前を書きしたプラカードを持って、駅へ迎えるに行く妻を追う。先回りして若いころのコートを着て戻ったふりをして階段を降りるが、ワンイーは無反応だ。これは心因性記憶障害で、昔の思い出が記憶を呼び戻すかもしれない、と医師から聞き、今度は友人に借りた古い写真を見せると、妻は夫がどれかを見分ける。だが、目の前にいる本人は「知らない人」と。あるいは古いピアノに向かい、思い出の曲を弾いてみる。妻は曲には激しく反応するが、弾いているのが夫だとはわからない。ついに、二〇年間収容所で書き溜めた妻への何百通もの手紙を一通ずつ読んで聞かせると、妻は大感激。手紙なら、妻と心が通うことを知ったイエーンシーは…。

革命の嵐の陰に咲いたあきらめない愛の物語。実際に下放されたチャン・イーモウ監督の思いが込められているという。

### 『妻への家路』

中国映画(110分)

監督: チャン・イーモウ

出演: チェン・ダオミン、コン・リー、チャン・ホエウェン

3月6日、TOHO シネマズ シャンテほか順次全国公開

©2014, Le Vision Pictures Co.Ltd. All Rights Reserved

